つどい

第436号
2025.2.1

発行・豊中歴史同好会
責任者　小川　滋

巨勢山古墳群の築造状況からみた南葛城地域の動態

御所市文化財課係長　金澤　雄太

はじめに

奈良県御所市に所在する巨勢山古墳群は、御所市のほぼ中央に位置する巨勢山丘陵上に古墳時代前期から終末期にかけて築かれた群集墳で、総数七〇〇基以上の小古墳が築造されている全国的にみても非常に規模の大きなものである。小稿では、この巨勢山古墳群の築造状況を時期ごとに整理し、それが南葛城地域の歴史動態とどのように連関するのかを論じたい。

「葛城」地域の範囲については、延喜式内社における葛城を冠する神社の範囲からより小さな範囲を想定する小葛城説と、大宝令制下の葛城の範囲を重視し、より大きな範囲を想定する大葛城説の両者が存在する。ここでその仔細については触れないが、小稿では大葛城説に基づいて葛城の範囲を捉えることにしたい。そのため、ここで述べる南葛城の範囲は、旧葛上郡と忍海郡域に当たる範囲であり、現在の区分で述べると御所市域と葛城市の南半分（旧新庄町域）が概ね該当する。

一　古墳時代以前の巨勢山丘陵

まずは古墳時代の前史である弥生時代の状況について簡単に触れておきたい。弥生時代の巨勢山丘陵上には今のところ小児墓を除く墓の存在は確認できておらず、巨勢山中谷遺跡、境谷遺跡、八伏遺跡といった弥生時代後期の高地性集落が複数確認されている。

巨勢山丘陵の北方約二キロメートルの地点には、南葛城地域の拠点的大集落として知られる鴨都波遺跡が存在し、その周囲約

巨勢山古墳群の築造状況からみた南葛城地域の動態　金澤　雄太
バス旅行　丹後半島の遺跡を巡る（下）　小川　滋
スポーツ安全保険の加入希望者募集